

一九八八年（昭和六十三年）度 研究所報告

一、組 織

一、所長事務取扱 箕浦恵了

一、主 事 安富信哉

一、研究所委員会 寺川俊昭学長事務取扱・福島光哉文学部長事務

取扱・北原了義事務局長・多田 稔大学院文学

研究科長事務取扱・藤田昭彦短期大学部長事務

取扱・小川一乗学生部長事務取扱・鍵主良敬図

書館長事務取扱・名畑 崇教授・長崎法潤教

授・細川行信教授

但し、昭和六十三年十月二十日の新当局誕生とともに、研究所組織は次のように変更した。

一、所長 渡辺貞麿

一、主事 安富信哉

一、研究所委員会 寺川俊昭学長・訓覇曄雄文学部長・北原了義事

真宗総合研究所紀要 第六号

一、昭和六十三年年度研究班

務局長・多田 稔大学院文学研究科長・藤田昭

彦短期大学部長・藤島建樹学生部長・古田和弘

図書館長・名畑 崇教授・長崎法潤教授・小川

一乗教授・鍵主良敬教授・細川行信教授

指定研究へ特定研究

◎研究名 真宗学事研究

研究課題 「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の

研究」

代表者 学長事務取扱 寺川俊昭

研究員 名畑 崇（チーフ・教授・日本仏教史学） 幡谷

明（教授・真宗学） 大竹 鑑（教授・教育学） 鈴木

幹雄(教授・倫理学) 木場明志(専任講師・国史学)
草野顕之(専任講師・日本仏教史学) 箕浦恵了(所
長事務取扱・教授・西洋哲学) 安富信哉(主事・助
教授・真宗学)

嘱託研究員
松本専成(滋賀県立玉川高校教諭) 柏原祐泉(本学
名誉教授・国史学) 井上 円(本学非常勤講師・真
宗学)

研究補助員
三本昌之(修士課程修了生・日本仏教史学) 深田虎
雄、綿谷勝信(以上博士課程修了生・日本仏教史学)
前田 一郎、判田哲也、江城忠雄、木越 康、杉本
理(以上博士課程) 山口昭彦(修士課程終了生・国
史学)

資料整理員
三木彰円(修士課程)

◎研究名
海外仏教研究

研究課題
「海外における仏教研究に関する方法論の研究およ
び文献資料の収集」

代表者
学長事務取扱 寺川俊昭

研究員
長崎法潤(チーフ・教授・インド学) 岩田慶治(教
授・社会学) 多田 稔(教授・英文学) 宮下晴輝(専

任講師・仏教学) 箕浦恵了(所長事務取扱・教授・
西洋哲学) 安富信哉(主事・助教授・真宗学)
今枝由郎(フランス国立中央史料科学研究所研究員)
大河内了義(神戸大学教授) リノ・ベリーニ(本学
非常勤講師・日本仏教史学) ジャン・ノエル・ロ
ベール(フランス国立中央科学研究所主任研究員・
高等学院講師) Y・カルナーダサ(ケラニア大学教
授、スリランカ) ミハエル・ハーン(ボン大学教授)

研究補助員
本田パトリシア(修士課程修了生・真宗学・在アメ
リカ) 浅野玄誠(本学非常勤講師・インド学)
畑辺初代、加藤 均、茨田通俊(以上博士課程)

指定研究〈委託研究〉

◎研究名
研究課題
西蔵文献研究
「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の
文献研究」

代表者
学長事務取扱 寺川俊昭
研究員
小川一乗(チーフ・教授・仏教学) 片野道雄(助教

授・仏教学) 小谷信千代、白館戒雲(以上専任講師・仏教学)

研究補助員 松田和信(本学非常勤講師・仏教学) アレクサンダー・ノートン(元客員研究員)

◎研究名 大蔵経学術用語研究

研究課題 「日本撰述の俱舎論関係典籍における学術用語の研究」

研究員 鍵主良敬(チーフ・教授・仏教学) 福島光哉、古田和弘(以上教授・仏教学) 木村宣彰、一色順心(以上専任講師・仏教学)

研究補助員 兵藤一夫、山野俊郎(以上本学非常勤講師・仏教学) 織田顕祐(元本学特別研修員) 萩原晃俊(博士課程修了生)

一般研究〈共同研究〉

◎研究テーマ 『教行信証』の基礎的研究

代表者 細川行信教授

真宗総合研究所紀要 第六号

研究員 細川行信、幡谷 明(以上教授・真宗学)

研究補助員 金信昌樹、村上宗博(以上博士課程)

一般研究〈個人研究〉

◎研究テーマ 「パリ仏典における大乘的思潮の形成」

研究者 吉元信行(専任講師・仏教学)

協力者 柏原信行(元本学非常勤講師・仏教学) 茨田通俊(修士課程)

◎研究テーマ 「生と思想——F・ニーチェを中心として——」

研究者 須藤訓任(専任講師・西洋哲学)

◎研究テーマ 「中国近世前期における仏典の開版と伝播」

研究者 藤島建樹(教授・東洋史学)

協力者 大内文雄(専任講師・東洋史学) 桂華淳祥(助手・東洋史学) 梶浦 晋(博士課程)

◎研究テーマ 「新美南吉資料研究——『哈爾濱日々新聞』掲載作品について——」

研究者 斎藤寿始子(教授・児童文学)

協力者 鳥越 信(大阪国際児童文学館総括研究員)

二、「研究所報」の発刊

第十九号

- 一、親鸞研究の一視点……………寺川俊昭
- 一、昭和六三年度「指定研究」研究計画紹介
- 一、昭和六二年度「指定研究」研究経過報告
 - 真宗学事研究……………三本昌之
 - 海外仏教研究……………浅野玄誠
 - 西藏文献研究……………松田和信
 - 大藏経学術用語語研究……………兵藤一夫
- 一、昭和六三年度「一般研究」研究目的紹介
 - 『教行信証』の基礎的研究……………細川行信
 - パーリ仏典における大乘の思潮の形成……………吉元信行
 - 生と思想——F・ニーチェを中心として……………須藤訓任
 - 中国近世前期における仏典の開版と伝播……………藤島建樹
 - 新美南吉資料研究
- 「哈爾日々新聞」掲載作品について……………斎藤寿始子
- 一、昭和六二年度「一般研究」研究概要
 - 『教行信証』の基礎的研究……………幡谷 明
 - 『歎異抄』のチベット語訳のための研究……………白館戒雲

- 日本僧伝文学の研究……………石橋義秀
 - 知識社会学の成立に関する研究……………千葉芳夫
 - 近世大谷派教団社会事業の研究……………佐賀枝夏文
 - 近畿における重力探査データのコンパイル……………西田潤一
- 一、客員研究員紹介
- 第二十号
- 一、真宗と歴史の接点——真宗学事研究への期待……………鈴木幹雄
 - 一、真宗学事研究・研究会報告
 - 真宗大谷大学の性格について(上)……………櫻部 建
 - 一、海外仏教研究・研究会報告
 - アメリカ仏教の歴史的社会的背景……………清田 実
 - 一、研究の現場より
 - インド・マドラス・アジア文化研究所について……………彦坂 周
 - 高倉学寮ゆかりの寺坊をたずねて……………深田虎雄
- 第二十一号
- 一、研究余瀝Ⅱ……………渡辺貞磨
 - 一、一九八九年度「一般研究」選考結果
 - 一、真宗学事研究・研究会報告
 - 真宗大谷大学の性格について(下)……………櫻部 建
 - 一、海外仏教研究・研究会報告

三、「指定研究」の動向

◎真宗学事研究

「大谷大学三百年史編纂・それに関する文献資料の研究」

「真宗学事研究」は、一九八五年度以来上記のテーマに従い、大谷史編纂を目的として近世以降の学事関係資料の収集・整理・研究を進めてきた。

一九八八年度も「刊行」「収集」「研究」の三分野で、従来の資料研究を継続するとともに、新たな作業にも着手した。

一、「刊行」

a、一九八七年度刊行予定の『上首寮日記Ⅱ』（天保七年～天保十三年）は、原本との照合等意外に手間取り、九月末日発刊となった。この結果本年度刊行予定であった『上首寮日記Ⅲ』（天保十四年～嘉永三年）は次年度五月中旬をめどに刊行の予定である。b、「条規集」は、本年度八名からなる編集委員会を結成し、まず前半部分

となる学寮時代の資料の読み込み・底本や各制条の内容と題名等の問題について討議を重ねた。ついで明治・大正期の資料では、条規に準ずるものの扱いの討議がなされ、その結果条規・学則のほかこれらの背景ともなり、深く関係する垂示・告知等の資料の掲載もおこなうことにした。この決定に従い、これまで収集した資料の中から取捨選択を行った。一年間に及ぶこれらの討議・資料の読み込みにより、次年度刊行に向けての資料の検討をほぼ終えることができた。名称の決定と、序並びに解題の執筆を待つて刊行する。c、『厳如上人一代記』は、第一巻分（一、二、三、四冊）と第二巻分（五、六、七、八冊）の資料原稿を完成し刊行の準備を整えた。

二、「収集・整理」

a、「学科講座変遷表」とb、「教職員在職表」は、教育の現場に理念・構想がいかに反映されてきたかを跡付けし、窺うためのものである。a、「学科講座変遷表」は昨年度に大正期を終えており、本年度は明治期へ遡り「真宗大学要覧」によって明治三十四年（一九〇一）の真宗大学創立時まで収集整理した。今後は高倉大学寮、さらには江戸時代の学寮講義をも対象として捉え、分類分析しなければならぬ。b、「教職員在職表」の作業は、各年度毎の人名を整理し、明治三十四年から大正十四年（一九二五）までの（真宗大学・

真宗大谷大学）カードを作成した。次年度は大谷大学以降の分を学科講座別に収集整理する。c、今年度新たに着手した作業として、大谷大学関係諸雑誌の論文の目録作成がある。昭和五十七年（一九八二）に『仏教研究・大谷学報・大谷大学研究年報総目録』が大谷学会より刊行されたことにより、『仏教研究』創刊以降の論文目録は公にされ、研究の便に供せられている。この『仏教研究』は、明治二十八年（一八九五）に創刊された『無尽灯』を引き継ぐものであり、これが大正九年（一九二〇）に至って『仏教研究』と『合掌』に発展分離したものである。さらにこの『合掌』は、大正十三年（一九二四）には『復興』と改題されている。これら『無尽灯』『合掌』『復興』等の学内雑誌の目録化は、真宗大学・真宗大谷大学・大谷大学と変遷してきた大学の各教員の問題関心・研究成果を知る上で重要である。また時事に関する記事の掲載もあり、大学史を見ている上で貴重な資料となる。本年度は『無尽灯』の目録づくりを進め、整理を終了した。今後は『合掌』『復興』等の論文目録を進め、公刊したいと考えている。またこれら諸雑誌以外でも『教界時言』『貫練会報』『貫練叢誌』『仏座』『開神』等、目録化して点検しなければならぬ学事関係雑誌が数多くあるので、それらのリストアップをする必要がある。d、「中外日報」の収集整理。昨年に引き続き、収集済みの学事関係資料個々にアルファベットと数字で検索のため

の記号をつけ、資料台帳の整理を行うことと、索引の作成に主眼を置いたため、新たな資料収集を行わなかった。なお昭和二十年（一九四五）まであるマイクロフィルムの資料を、早急に整理しなければならぬ。e、『上首寮日記』学事関係資料のカード化。今年は慶応三年（一八六七）一月から明治五年（一八七二）十一月まで、人名・事項等のカード化を行った。これで『上首寮日記』全五巻のカード化を終え、「学事史略年表」や「講師年譜」作成の資料として利用を図る事ができる。f、「資料整理」。これまで採集した写真資料やコピーを人別・事件別などの項目別に編集合冊し、研究の利便化を図るものである。本年度は宮地義天の日記や樋口龍温の手控を翻刻し、関連資料や論文と共に仮綴じ製本した。g、「学事史年表」作成。これは高倉学寮における宝暦五年（一七五五）から明治二十年（一八八七）にわたる安居講義題目と講者を列記した『真宗大学寮講義年鑑』（明治二十五年刊）より作成した典籍・人物別カードを編年順にパソコンに入力し、検索の能率をはかるものである。このほか「慧空」「宣明」等の年譜カードを入力するとともに、整理と校正を行った。また入力する際のカードについては規格統一など種々の問題点があり、今後の研究におけるコンピュータの役割を鑑みれば、「学事史略年表」作成のための編年処理はデータベースの一形態にすぎず、今後多様な処理方法の開発とデータベースの蓄積

を行わなければならない。h、資料探訪調査。今年度は新潟県内の講師出身寺院及び学寮ゆかりの寺院調査を行った。徳龍・行忠二人の講師を出した無為信寺では、非常に多数の未発表の講録があり、照合のため持参した著書目録は全く用をなさず、ごく一部の講録の収集にとどまった。また徳龍の日記「不爭室日記」が存在することが判明したが確認できず、再訪を考慮中である。また近世における新寺建立に関わる貴重な資料も採集できた。このほか出雲崎では『上首寮日記』最初の記録者である寮司澄海の入寺寺院善乗寺、贈講師智現の浄玄寺、嗣講中観の浄厳寺、寮司善念・善現の光照寺、及び智現に関する資料を所蔵する渡辺秀夫家を調査し、いくつかの新事実をえることができた。この成果は研究会と『研究所報』第二号で報告した。

三、「研究」

今年度は「条規集」の編纂ということもあり、明治以降の一般教育史や仏教史学の様相というテーマで研究会を開催した。この他明治期における異安心事件や資料探訪調査に基づく研究成果についても発表を行った。

a、研究発表

一、日 時 一九八九年三月二十九日

真宗総合研究所紀要 第六号

講 題 「近代仏教史学の萌芽」

発表者 嘱託研究員 柏原祐泉氏

二、日 時 一九八八年十二月十五日

講 題 「新潟県内学寮関係寺院調査報告―水原無為信寺、

出雲崎善乗寺・浄厳寺・浄玄寺―」

発表者 研究員 木場明志氏

研究補助員 山口昭彦氏

b、講演会

一、日 時 一九八八年九月十四日

講 題 「明治・大正期の日本教育通史」

発表者 大谷大学教授 大井令雄氏

二、日 時 一九八八年十月二十日

講 題 「教団史に於ける信順・請求の法戦の位置について」

て

発表者 大谷大学博士課程 畑辺初代氏

c、『研究紀要』

資料紹介として『本山上檀古記録抜萃』を翻刻掲載した。これは江戸時代宗政機構中の最上級機関である上檀の間に於いて記録された『上檀間日記』より学事に関する記事を抜粋し、更に学寮草創に関わるとされる寺院由緒を編集したものである。

本資料は明治二十二年（一八八九）、文部省の要請で学寮沿革史を編纂した際、参考資料として収集したものと考えられる。

d、『研究所報』

一、「真宗大谷大学の性格について」

八十七年度嘱託研究員 桜部 建氏

これは一九八八年三月二十三日に口頭発表されたものを翻刻し、第二十号・二十一号に分割掲載した。

二、「高倉学寮ゆかりの寺坊を訪ねて」

研究補助員 深田虎雄氏

新潟県出雲崎善乗寺・愛知県碧南光専寺等を取り上げて探訪調査の成果の一端を第二十号で紹介した。

なお畑辺氏の発表は『研究所報』第二十二号に掲載する。柏原氏の発表についても第二十四号に掲載を予定している。

（井上 円・三本昌之記）

◎海外仏教研究

「海外における仏教研究に関する方法論の研究および文献資料の収集」

大谷大学真宗総合研究所における「海外仏教研究」は、昭和五十

七年度に発足して以来、一貫して欧米言語によって出版される仏教研究の現状を把握・検討してきた。その主たる目的は、そうした成果を日本の研究者に紹介するとともに、近年益々さかんになる欧米諸国の仏教研究より、特異で有益な方法論を学ぶことにある。

日本における伝統的な仏教研究の歴史は古い。それに対して欧米諸国における仏教研究は、その歴史は浅いが、文献学、歴史学の近代的方法にもとづき、数多くのすぐれた研究成果を生みだしている。明治以降、こうした近代的な仏教研究に対して、日本の研究者の中にも、伝統的な学問研究の方法論に拘泥することなく、積極的に欧米の学問研究の方法論を導入しようとするものも多くあらわれた。

近年、欧米諸国の仏教研究はそうした第一世代をへて、宗教研究の側面において、あらたな方法論の提起をしている。これらは、キリスト教神学と哲学研究、それに文献学などが有機的に昇華して、新たな境地を開拓している。われわれは、その新しい方法論を見極めることによって、日本における仏教研究の方法を問い直していきたいと考えている。

具体的な活動としては、欧米で発表されている著作・論文の文献目録を作成することを主眼とし、そのために必要な資料を収集し分析調査を継続している。

こうした研究の過程における昭和六十三年度の活動は、概ね以下

の五項目に纏めることができる。

一、文献資料の収集

昨年度はおよそ三百冊の単行本、百種の雑誌を収集し、必要なデータを抽出した。

二、文献資料のデータベース化

パーソナル・コンピュータ(PC9801VX21)を購入し、既収集データのデータベース化に着手した。具体的には、現在までに収集済みの約三千冊の書籍データを入力し、また、雑誌に掲載されている欧米言語による仏教関係論文から、まず日本仏教関連のものに限定してデータベース化をはかり、ビブリオグラフィーの作成に役立てた。

三、ビブリオグラフィーの作成・発表

二項に記載した日本仏教関連の雑誌文献目録のデータベースを利用して、欧米言語による日本仏教関係の論文目録を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』Vol. 6 (1988) に『BIBLIOGRAPHY OF FOREIGN LANGUAGE ARTICLES ON JAPANESE BUDDHISM 1960-1987』と題して発表した。

欧米の諸言語によって発表された論文・著作を対象としたビブリオグラフィーの作成は海外仏教研究発足当初からの基幹的課題である。一、の文献資料の収集、二、の文献資料のデータベース化も、

基づくところこのビブリオグラフィー作成のための資料収集ならびに収集資料の分析・活用のために行なわれている。

しかしながら、ビブリオグラフィーの作成には、なお解決せねばならない課題が山積している。たとえば、我々が欧米言語と呼んでいる言語範疇もおおいに検討されねばならない問題である。調査の過程で実感することは、仏教研究の意外な広範性である。英・独・仏の3言語に対する当初の予想はそのままに、ロシア語・イタリア語等による仏教研究著作・論文も多く、こうした側面においてもなお慎重に検討せねばならない課題は多い。その他、単に時代順、著者名順に著作・論文を整理させるのではなく、我々にとってもっとも相応しい分類・整理を目的するならば、個々に特異な創造性を有する論文のジャンル分けは容易なことではない。

さりとていたずらに論議を重ね、具体的な対象を提示しないとなれば、衆目の批判・鞭撻もまたかなわない。昨年度は意を決して、比較的分析分類作業の整っている日本仏教関係に限定して前述のビブリオグラフィーを発表した。現在のところ好意的に受け入れられているようであるが、識者のご批判を仰ぎたい。

今後、「インド仏教」「中国仏教」など、範囲を限定したビブリオグラフィーを発表し、ご批判を仰ぎながら最新の情報を加味したサプルメントを追加して、全体的なビブリオグラフィーの完成をめ

ざしたい。

四、海外在住研究者及び海外視察者による研究会の開催

「研究会」は、海外における仏教研究の動向を探る、という「海外仏教研究」の基本姿勢に基づき、海外在住（あるいは海外の仏教研究事情に詳しい日本の）研究者を招いて、最新の情報を得る機会として企画されている。今年も九回開催され、今日の仏教研究に関わる重要な研究者から、貴重な研究成果の発表や動向をうかがうことができた。我々が日常的に文献を通じて接しているこれらの研究者から、現在の研究の内容を直接に見聞し、さらにアドバイスを得ることができるのは貴重な体験である。国際的な研究者の交流の活性化する現在、こうした研究会の開催は貴重な情報源となっている。したがってこの「研究会」の特色として、研究発表後、できる限り多くの時間を聴衆の側からの質問、あるいは意見の交換に利用できるよう配慮している。

研究会の発表内容は、一部訂正補遺をなして、『研究所報』『研究紀要』に掲載している。「研究会」は原則として公開で行われ、近郊の大学、研究機関、関係者にも案内し、常時二十名以上、多いときは五十名程度の規模で開催された。以下に開催日時ならびに発表者、発表題目を掲載する。

(1) 六月二十三日

「アメリカ仏教学の社会的背景」

ウィスコンシン大学教授 清田 実

(2) 七月十四日

‘Joyoji Eon’s Contribution to Chinese Pure Land Buddhism’

Institute of Buddhist Studies,

Assistant Prof. Dr. Kenneth K. Tanaka

(3) 九月九日

‘Parallel Ideas in Abhidharmakośa-Bhāṣya and Patañjala-Yoga-Bhāṣya’

Jaina Visva Bharati, Dr. Natmal Tatia

(4) 十月十一日

「チベット仏教の活仏制度について」

フランス国立科学センター研究員 今枝 由郎

(5) 十月十二日

「チベットの仏塔について」

フランス国立科学センター研究員 今枝 由郎

(6) 十一月八日

「フランスにおける日本宗教研究の現状」

フランス国立科学センター研究員

Jean Noël Robert

(7)十二月一日

「ウィーン大学留学報告」

元光華女子大学講師 佐藤 智水

(8)十二月十三日

‘Buddhism and Feminism’

Univ. of Wisconsin-Eau Claire

Prof. Dr. Rita Gross

(9)一九八九年二月二十八日

「チベットのことはいつつ」

Tibetan Scholar, Ngawangthondap Narkyid

五、研究員の海外派遣

研究員の海外派遣は二度おこなわれた。

a、海外仏教研究研究員岩田慶治教授がネパールの仏教および民間信仰の現地調査を行った。

b、海外仏教研究研究員安富信哉助教授が、アメリカの複数の大学を訪ね、研究者と交流をもつとともに、アメリカの仏教研究の現状を調査した。

(浅野玄誠記)

◎西蔵文献研究

「大谷大学所蔵の北京版西蔵大蔵経及び蔵外文献の文献研究」

一、研究資料

大谷大学図書館にはサンスクリットから訳された翻訳文献としての「北京版西蔵大蔵経」および「ナルタン版大蔵経」を中心に、チベット人自身によってチベット語で著された所謂「蔵外文献」も含めて、数千点の貴重なチベット語文献コレクションが保存されている。これらの文献は寺本婉雅（二八七—一九四〇）によって北京・青海方面で蒐集されたものが主であるが、他にチベット入国の旅の途上、雲南省に消息を断った大谷派僧、能海寛（一八六八—一九〇一）の収集文献を含み、さらには近年になってインド、ブータン等より購入・寄贈されたものも増えている。

西蔵文献研究班はこれらのチベット語文献を整理・研究するとともに、貴重資料を内外に紹介することを目的に組織され、発足以来「北京版西蔵大蔵経」の勘同目録の作成および蔵外文献中に含まれる稀観書の研究・出版を継続中である。昭和六十三年度は勘同目録の編集作業の他、当初より出版が予定されていた蔵外文献から稀

観書中の稀観書とでも言うべきツァンナクパの『知識論決択広註』善釈要集』を刊行することができた。

ツァンナクパ（生没年不詳、十二世紀）は、チベットにおける論理学研究に礎を築いたサンプ学問寺の大学者チャパ（一一〇九—一六九）の八大弟子の一人で、本書の他に七つの著作があったと伝えられているがいずれも散逸した。本書はインドにおける仏教知識論を大成したダルマキールティ（ca. 600—660）の『知識論決択（*Pramāṇavivēka*）』に対する註釈書である。『知識論決択』にはプトン（一二九〇—一三六四）とダルマリンチェン（一三六四—一四三二）の註釈が知られているが、本書はそれらよりはるかに古く、チベット語で書かれた現存最古の註釈書である。しかも大谷大学所蔵本は世界の孤本で、これ以外には写本も木版本も全く知られていない。本書は、ダルマキールティ研究において計り知れない価値を持つのみならず、チャパの著作がすべて散逸した現在、チベットにおける仏教の流伝後期に大きな役割を果たしたサンプ学問寺系の認識論と論理学を解明する上での第一級資料であると言っても過言ではない。

なお本書の解題については、以前より本文献の重要性を指摘されて複写を求められるなど強い関心を示されていたウィーン大学のシュタインケルナー教授(Ernst Steinkellner)の紹介で、ワシント

ン大学のファン・デル・カイプ博士(Leonard W. J. van der Kuip)に執筆いただいた。カイプ博士はチベット仏教の認識論と論理学、特にサンプ学問寺系の文献に関心を寄せられている気鋭の学者である。

本書の出版にあたっては、臨川書店との契約に基づき、『大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書』第二巻として同書店から刊行された。同叢書第一巻は前年度に出版されたモンゴル人ゲンポキヤブによって訳されたチベット語訳『大唐西域記』である。両巻は現在当研究所においても取り扱っているので入手希望者はお問い合わせいただきたい。

蔵外文献については次年度以降も整理を終え次第、順次出版を予定しているが、現在次のような文献をリストアップしている。

- (1) No 三五四—三六五 中観論書集
- (2) No 三九五—三九六 アビサマヤ関係論書によるセラ寺教科書集
- (3) No 三九七 『人中論』によるセラ寺教科書
- (4) No 三九七—四〇〇 サキヤ派所伝の『俱舍論』古註釈
- (5) No 三九八—四〇〇 ウパローセルの文法書
- (6) No 四〇一—四〇二 カラーパの文法書
- (7) No 四〇三—四〇四 チベット語による中国仏教史

(松田和信記)

◎大藏經學術用語研究

「日本撰述の俱舎論関係典籍における學術用語の研究」

本指定研究は昭和六十二年度に引き続き、「日本撰述の俱舎論関係典籍における學術用語の総合的研究」という研究課題のもとに、『大正新脩大藏經』全百巻のうちの第六十三巻・第六十四巻及び第六十五巻の一部に収められる日本撰述の『阿毘達磨俱舎論』に関する注釈書類（日本撰述の『中論』に関するものを含む）の解説研究に従事した。

今ここで改めて言うまでもなく『大正新脩大藏經』全百巻は、最も整備された仏教典籍の集大成として不動の価値を有している。それは単に仏教の三蔵を網羅しているということのみならず、それらの典籍を生んだ時代の政治・経済・社会機構・法制や、仏教と他思想との交流などの諸記録を含んでいることからして東洋の思想文化全般を知るための重要な基礎資料であるとも言うことができる。従ってこのような豊かな内容を持つ『大正新脩大藏經』を一部の専

門的な研究者のためだけでなく、広く人類全体に開放するためには、取り付きにくい藏經の本文に対する簡便な手引きが必要である。『大正新脩大藏經索引』はこのような意図のもとに企画され、研究が推し進められてきた。従って多くの一字索引がそうであるように漢字を単に記号として扱い、その検索を容易ならしめるために企画されたものとは、本質的な意図が異なるのである。大谷大学はそうした便宜を世界に提供すべく他の仏教系五大学と共同して、大藏經學術用語研究会を組織し、積極的に研究の一翼をにない、その成果を昭和三十六年以来既に八冊の『大正新脩大藏經索引』として刊行してきた。「日本撰述の俱舎論関係典籍における學術用語の総合的研究」は、大谷大学が担当する最後のものであり、昭和六十三年度はその最終年度に相当する。従って前年度までの研究を踏まえて、本年度末にはそれらの成果を『大正新脩大藏經索引』第三十五巻続論疏部1として刊行する計画であった。

周知のように世親の『阿毘達磨俱舎論』は仏教の教義を知るために不可欠の用語や概念などを最も適切にまとめたものとして古くから重視されてきた。いわば仏教教理の基礎学を明すものと見做されてきたのである。従って多くの人々によって研究され、注釈書も少なからず現存している。今回の研究の直接の対象である日本人の手になる注釈書群もその時代の学風や研究者の目のつけどころを窺い

知る上で貴重なものである。

既に若干触れたように、本研究の成果として刊行される索引は、当該典籍の中に含まれる様々な学術用語の研究整理の結果として出版されるものであって、単に文字の検索のためにのみ製作された索引とは意味が異なる。従って本索引の作成にあたっては、他の如何なる事柄にも優先して当該典籍の厳密な解説が為されなければならないこととなる。このような理由によって昨年度以前は、日本撰述の俱舎論関係典籍の解説研究に大半の時間を割いてきた。その結果として、約十二万語以上の学術用語が精選され、カード化された。

『大正新脩大藏經索引』はこれらの学術用語を五十音順に並べてその藏經中における所在を示した音次索引と、これらの用語を予め定められた三十の異なる範疇に分類して五十音順に並べた分類項目別索引との二部を主な内容とする。従って選出された約十二万以上の用語の一つ一つに対してそれが定められた三十の項目のいずれに該当するかを決定し、その後で全ての用語を五十音順に配列するという過程をとることになる。

昭和六十三年度は、こうして出揃ったカードを出版社に持ち込むための原稿化の作業の継続から始まった。用語をカード化する時もそうであったが、こうした作業には多くの学生諸君の協力が不可欠である。何分にも十二万余のカードを一枚一枚原稿用紙に書き写し

ていくという途方もない作業なのであるから。学生諸君の献身的とも言うべき協力を得て五月上旬にはこの作業も終了し、直ちに出版社へ搬入した。そして七月下旬には早くも活字化された原稿の第一便が送り返されてきた。以後、初校・二校を経て三校・念校終了に至るまで遠々と校正作業が続いたのである。この過程で今回特に問題となったことは、今まで常套としてきた活版をやめて電算写植を導入したことである。従来の活版による印刷方式に関しては、我々の側にも既に多くの経験と実績があり、出版にこぎつけるまでの手順等もほぼ自家薬籠中のものとなっていた。今回電算機を導入するにあたり、我々は従来の手仕事の持つ良い部分はそのままにして、都合の悪い部分のみを機械によって改善できるつもりであったので、この初めての方式に全く不安を持たなかった。しかしながら、いざ蓋をあけてみると従来からは全く考えられないトラブルに再三再四見舞われることとなった。その内容は筆舌に尽し難いが、瑣細な一例を挙げてみよう。例えば、従来の活字方式であればこちらが訂正しない限り一度採用された文字が他のものに変わることなく原則的にあり得ないが、電算機では一つの操査ミスによって何も指示をしていない文字が別の文字に変わってしまう。それも特定の一箇所のみではなく全ページの同一文字全てに互ってである。これはもう校正云々の次元ではとてい片付かない問題である。また機

械自体のトラブルによって何ページもの記載が欠落してしまったこともあった。そうした我々には全く理解不可能な様々な問題进行处理しながら、一方では同時に本索引収録の典籍に関する解題や、本索引についての凡例をまとめていった。また音次索引の索引とも言うべき検字索引——音次索引の首字を総画数と四角號碼によって検索できるようにしたもの——を作成し、これらも順次活字化していった。

こうして出来上った『大正新脩大藏經索引』第三十五卷統論疏部一は、音次索引四八三ページ、総六〇九ページにわたるものとなった。この索引の完成によって十三世紀から十九世紀に至るわが国における『俱舍論』研究の展開がより正確に把握されるであろう。『俱舍論』が仏教研究の基礎と見做されてきた歴史の上から言えば、その研究の展開はわが国における仏教研究の変遷を如実に物語るものと言うべきであり、それによってその時代の学的傾向を窺い知ることとも不可能ではない。また今日においては、『俱舍論』本論の研究の上で、従来の伝統的解釈を参照するための有力な手がかりとなることは間違いない。この他にも本索引の有効な利用の仕方はほとんど無数にあると言ってよい。この索引が有縁の人々の研究に資することを願って止まない。

(織田顕祐記)

執筆者紹介

(一九八八年度)

研究員	細川行信	本学教授	真宗学
研究員	藤島建樹	本学教授	東洋史学
研究員	斎藤寿始子	本学専任講師	児童文学
研究員	吉元信行	本学専任講師	仏教学
嘱託研究員	柏原信行	元本学講師	仏教学
研究補助員	深田虎雄	本学博士課程修了生	日本仏教史学
研究補助員	金信昌樹	本学博士課程	真宗学
研究補助員	小妻典文	本学博士課程	真宗学
研究補助員	梶浦 晋	本学博士課程	東洋史学
研究補助員	茨田通俊	本学修士課程	インド学

(寄稿論文)

佐藤智水	元光華女子大学講師	真宗学
瀧 弘信	元本学特別研修員	真宗学
リタ・グロス (Rita Gross)	ウィスコンシン大学オークレア校助教授	比較宗教学
シグリン・ディーツ (Siglinde Dietz)	ゲッティンゲン大学教授	仏教学
ナスマル・タティア (Nathmal Tatia)	ジャイナ研究所所長	仏教学